

形容詞-名詞間の典型性が名詞句の再生に及ぼす効果

○ 藤木 大介 井上 雅美 (非会員) 中條 和光
 (広島大学大学院教育学研究科)
 Key words: 言語理解, 名詞句, スキーマ

限定用法の形容詞を伴う名詞句はどのように理解されるのだろうか. たとえば, 形容詞“赤い”と名詞“リンゴ”からなる名詞句“赤いリンゴ”の理解過程を調べるためには, 形容詞と名詞それぞれの理解過程を調べるだけでは不十分である. これらの形容詞と名詞とが結合される過程を調べなければならない.

Murphy (1990) は, 概念表象のスキーマによる説明を援用し, 名詞句の理解過程を説明した. 概念スキーマに基づけば, 概念はスロットとその値との組み合わせで表現される (図1). したがって, 形容詞が名詞を修飾するという事は, 形容詞が名詞のスキーマの持つスロットの値やスロット自体を変更することであると説明される. たとえば, 名詞句“赤いリンゴ”を理解する際は, 形容詞“赤い”は名詞“リンゴ”の概念の色に関するスロットが取り得る値の1つを具体的に示すことで修飾する. この際, スロットに元々“赤い”という値が入っているならば, 値の変更の必要はない. これに対し, 名詞句“黄色いリンゴ”を理解する際は, スロットの値を変更しなければならない. Murphy (1990) は, このようなスキーマの変更は理解時間に反映される考え, “赤いリンゴ” (典型名詞句) よりも “黄色いリンゴ” (非典型名詞句) の方が理解に時間がかかることを示した.

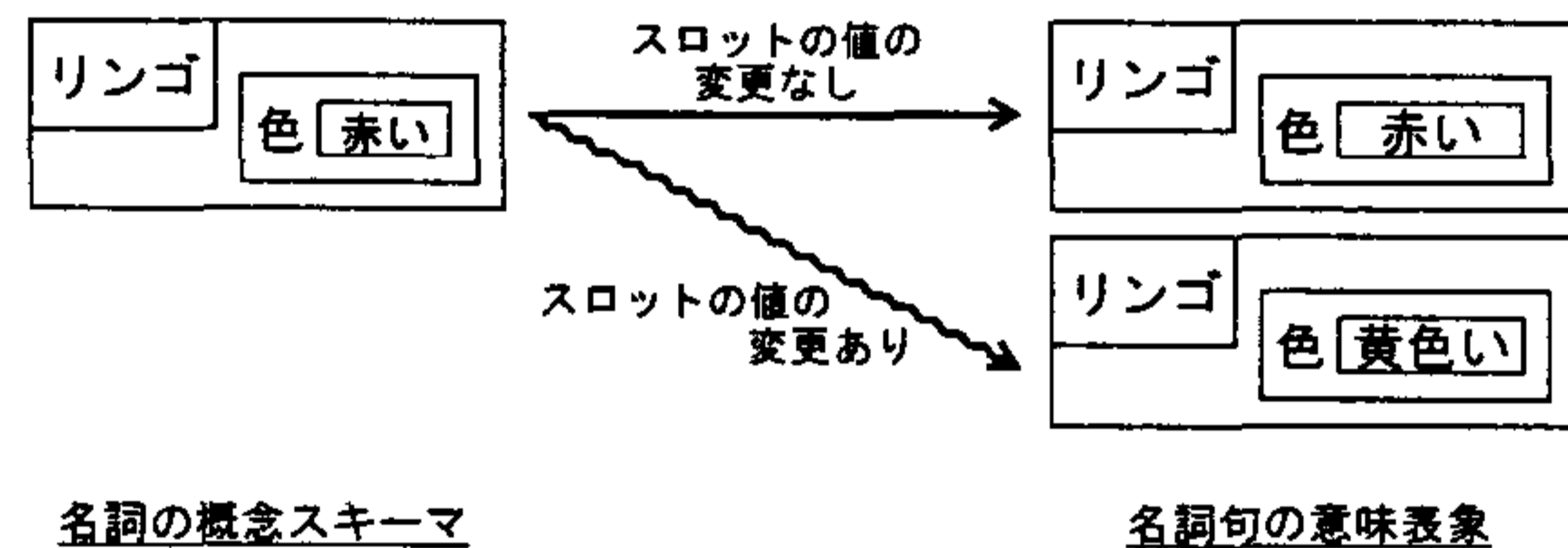


図1 名詞句の意味表象の形成過程

しかし, 理解時間を指標とした実験では, 実際にどのような意味表象が形成されたかを確認できず, 理解の結果として形成される表象自体を直接検討できない. そこで本研究では, 限定用法の形容詞を伴う名詞句の理解過程においてスキーマの変更による意味表象の形成がなされているかを検討する. 具体的には, 典型名詞句と非典型名詞句とを記憶させ, 再生時に生じる誤りの分析から推定する. もし, 典型名詞句“赤いリンゴ”でスキーマが変更されずに記憶されるならば, 再生時には形容詞が脱落した“リンゴ”という再生が増加すると予測される. これに対し, 非典型名詞句“黄色いリンゴ”でスキーマが変更されて記憶されるならば, 再生時には正確に“黄色いリンゴ”と再生できると予測される.

実験

方法

材料 形容詞と名詞とからなる2種類の名詞句, 典型名詞句と非典型名詞句とを作成した. 典型名詞句とは, 形容詞が名詞の典型的な属性を指示するものである. 非典型名詞句とは, 形容詞が名詞の典型的な属性以外を指示するものである. このほかに名詞のみからなる刺激も用いられた. そして, 典型形容詞4項目, 非典型形容詞4項目, 名詞8項目からなるリストが構成された.

器具 パーソナルコンピュータ (DELL Dimension 4100), 17インチ CRT, Microsoft Visual Basic 6.0 を使用した.

手続き 実験は, 名詞句, および名詞を記憶する学習段階と, それを1週間後に再生するテスト段階とに分かれていた. 記憶段階での課題は, モニタ上に現れる名詞句, および名詞の項目を記憶することであった. 各項目は4000ms ずつ呈示された. 1試行につき16項目呈示され, 1試行中で同じ項目は1度のみ呈示された. 被験者は呈示される項目をどのような方略でもかまわないので記憶するように教示された. このような試行が3回行われ, 毎試行, 項目はランダムな順序で呈示された. そして, 最後に, 項目を記憶できたかを確認するための自由再生課題が行われた. 被験者は白紙に記憶した項目を書き出した. その後, “別の課題を行うので1週間後にもう1度実験に協力してほしい” という旨を伝え, 記憶段階を終了した. そして, テスト段階での課題は, 学習段階で記憶した項目を制限時間5分で自由再生することであった.

被験者 日本語を母国語とする大学生, および大学院生40名 (男性15名, 女性25名), 平均年齢21.7才であった.

結果と考察

学習段階での正再生率が60%を下回った被験者3名を分析の対象から除外した. 残り37名の学習段階における被験者ごとの平均正再生率は, 典型名詞句が0.93 (SD=0.13), 非典型名詞句が0.95 (SD=0.10), 名詞が0.94 (SD=0.10)であった. テスト段階での被験者ごとの平均正再生率は, 典型名詞句で0.68 (SD=0.28), 非典型名詞句で0.68 (SD=0.31)と等しかった. そこで誤答の内容分析を行う.

誤答は4種類に分類でき, 形容詞が脱落したもの (丸いジャガイモ→ジャガイモ), 異なる形容詞が付加されたもの (きれいな景色→美しい景色), 名詞が異なるもの (速いジェット機→速い飛行機), 全く再生されないもの, であった. 被験者ごとの典型名詞句と非典型名詞句との誤答の数を比較し, 誤答数に差が生じた人数を表1に示す. 符号検定の結果, 形容詞の脱落においてのみ有意な差が認められた ($p < .05$). 分析の結果から, 自由再生課題において典型名詞句の方が非典型名詞句よりも形容詞が脱落して再生されやすいことがわかった. したがって, 典型名詞句では, 名詞のスキーマのスロットの値がデフォルト値のまま記憶されるために限定用法の形容詞が付加されていたという情報が失われやすい, ということが示唆された. また, 非典型名詞句では, 形容詞によって名詞のスキーマのスロットの値が変更され, 変更後の値によって再生時に再構成されることが示唆された.

表1 誤答の内容分析

誤答の種類	誤再生			再生なし
	形容詞の脱落	異形容詞の付加	異名詞	
典型>非典型	6	5	1	7
典型<非典型	0	2	5	12

表中の数字はテスト段階の再生で誤答数に差が生じた人数

文献

Murphy, G. L. 1990 Noun phrase interpretation and conceptual combination. *Journal of Memory and Language*, 29, 259-288.

(FUJIKI Daisuke, INOUE Masami, CHUJO Kazumitsu)